

キリシタン版（キリシタンばん）

1590年(天正18)日本イエズス会が輸入した西洋活字印刷機により、91年から1614年(慶長19)まで日本で印刷された日本イエズス会公認の版本をいう。

活字印刷機は文書伝道を重視した東インド巡察師バリニャーノが天正遣欧使節に依頼し、その帰国に際しバリニャーノ自身が将来して、肥前の加津佐でローマ字版《サントスの御作業のうち抜書》(1591)が初めて刊行されたが、戦乱と迫害のため天草(天草版)、長崎、京都で刊行が続けられた。

現存するもの31種、約73本。語学書にはロドリゲスの《日本大文典》《日葡辞書》《落葉集》など、宗教書には《聖イグナチオ・デ・ロヨラの心霊修行》《どちりなきりしたん》《コンテンツス・ムンヂ》などで、《ぎや・ど・べかどる》はキリシタン文学の傑作である。教外文学書には、《平家物語》《和漢朗詠集》《伊曾保物語》などがある。使用された活字はローマ字と国字(漢字、ひらがな、かたかな)で、欧文書と和文書がある。

井手 勝美 (c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved.

天草版（あまくさばん）

キリシタン版のうち九州の天草学林で出版されたもの。1592年(文禄1)から96年(慶長1)に至る。キリシタン版は最初1591年、肥前国の加津佐(かづさ)で出版されたが、まもなく印刷所は天草に移された。

主としてローマ字版で、国字版は《ぼうちずもの授けやう》(1593刊か)1種のみが天草版と推定される。1592年刊の《どちりなきりしたん》《ヒデスの導師》、《平家物語》(口訳)がもっとも早い刊行書である。その後、《いそほのはぶらす(伊曾保物語)》《金句集》、アルバレス編《ラテン語文典》、《羅葡(らぼ)日対訳辞典》、《コンテムツス・ムンヂ》(推定天草版)、イグナティウス・デ・ロヨラ著《心霊修行》、バルトロメウ著《精神修養の提要》(推定天草版)が刊行された。のち1598年ころ、印刷所は長崎学林に移された。

宗政 五十緒 (c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved.

伊曾保物語（いそほものがたり）

仮名草子。元和年間(1615-24)刊行。3巻。《イソップ物語》の翻訳であるが、全部で94話。最初の30話はイソップの逸話、のちの64話が動物の寓話である。

《イソップ物語》は、1590年(天正18)スペインの宣教師バリニャーノによって日本にもたらされ、九州天草で《エソポのハプラス》として日本語訳ローマ字で印刷された。これが、日本における最初の西洋文学の翻訳本である。

この元和の書は、それとは異なって古活字版日本字で翻訳されたものである。天草版の2巻70話と共通するものは25話しかない。教訓的な説話集として歓迎され、何度も再版された。またのちの江戸時代小説に与えた影響も大きい。

野田 寿雄 (c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved.

イソップ物語（イソップものがたり）

ギリシアのイソップ(アイソポス)が作ったと伝えられる動物寓話集。動物などの性格や行動に託して、ギリシアの一般大衆に、いかにすれば人は平穩無事に人生をおくることができるかを教える処生訓であった。この寓話形式はすでにヘシオドス(《農と暦(仕事と日々)》202～212行)、アルキロコス(断片86,89)などによって使用され、前6世紀ころイソップによって大成された。その後、前5～前4世紀に流行をみ、また文人などにも愛好されて、アリストファネスやクセノフォンなどが著作の中でイソップの名とともに動物寓話に言及している。ソクラテスは獄中においてイソップの寓話を詩文に移していたとプラトンは伝えている。イソップは民衆に寓話を語り聞かせただけで、実際には文字にしなかったと言われている。しかし、イソップの名があまりに有名であったため、イソップの作品の改作や模倣、別人の作品や外国に起源をもつ類似の物語までもイソップの作品の中に混入される結果となった。このような過程を経て、これらのいわゆる《イソップ物語》は、ローマ時代に至ってラテン語に移され、人気を得ることとなった。そして現代に至るまで種々の翻訳や改作が行われ、また類似の物語(J. de ラ・フォンテーヌの《寓話》など)が生み出されて、老若を問わず親しまれている。

[ギリシア語版] 《イソップ物語》の最初の集大成はファレロンのデメトリオスによってなされたと3世紀の伝記作者ディオゲネス・ラエルティオスは伝えている。散文体であったらしいが伝存しない。しかし、今日に伝わる《イソップ物語》の中核をなすものと思われる。伝存する最古の集成は《アウグスタナ》の名で知られる1世紀ころのもので、約230編から成る。次に古い集成は2世紀末のローマ人バブリオスがコリアンボス調の詩形に改作したもので、古代において人気を博した。本来10巻のうち2巻のみが現存する。これは1843年に発見されてギリシア語原典の底本となった。ビザンティン時代には上述の《アウグスタナ》が、さまざまに短縮、改作された物語を生み、100以上に及ぶ写本がイソップの名で今日に伝わっている。以上の諸集をもとにプラヌデスが《アクルシアナ》と題する寓話集をイソップの伝記を付して編纂した。

[ラテン語版] 2世紀の随筆家ゲリウスの引用から、前3世紀の詩人エンニウスがすでに《イソップ物語》をラテン語に移したことが知られる。しかし、最も有名なものはファエドルスによるイアンボス調のラテン語訳である。これは現存する。4世紀のアウィアヌス Avianus はエレゲイア調の詩文に改作し、42編が伝わっている。9世紀に至ってディアコヌス Ignatius Diaconus がコリアンボス調の詩文に改作し、53編が現存する。なお、1952年のB. E. ペリーによる《イソップ物語》は、イソップの伝記とともにギリシア語とラテン語の寓話725編を集録している。

高橋 通男 (c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved.

寓話（ぐうわ fable）

寓話という日本語は、おそらくラテン語 *fabula*（広義の作り話）ないしそれを継承する近代ヨーロッパ語の訳語として 20 世紀に入ってから用いられるようになった言葉で、作り話の中でもイソップ寓話（《イソップ物語》）を典型とするおもに動物を主人公にした短い教訓的なたとえ話をいう。ヨーロッパではギリシア以来イソップ（アイソポス）が寓話の始祖とされてきた。イソップは前 6 世紀のフリュギア人と伝えられ、彼が語ったといわれる寓話がギリシア語の文章で記されたものが最も古いイソップ寓話である。約 400 編のそれらの話はイソップの創作というよりも、ギリシアや中近東に古くから伝わる話の集大成と考えられる。イソップ寓話はギリシア時代から修辞学の教材となり、ラテン語訳、翻案、模倣作品等が加わって、多様な形で継承されることになる。

イソップ以後では、1 世紀のファイドロス、アウティアヌスのラテン語寓話が知られている。ヨーロッパ各国語のものにはフランス中世の《イソペ（小イソップ）集》があり、なかでも 12 世紀マリールー・ド・フランスの 103 編が目玉に値する。寓話の教訓は伝統的に处世の知恵を説く現世的なものだが、中世の教会で説教に引用されることも多く、教科書としての役割とあいまって広く親しまれた。

イエズス会が教化に用いていたイソップ寓話集が宣教師によって日本に伝えられたのが天草本《エソポのハブラス》（1593）で日本におけるヨーロッパ文学翻訳の嚆矢（こうし）となった。

ルネサンス期フランスでは寓話として見るべき作品はないが、17 世紀に J. de ラ・フォンテーヌが韻文による《寓話》（1668—94）を刊行して伝統を一新した。ラ・フォンテーヌはイソップ寓話のみならずインドの《パンチャタントラ》その他からも題材を得て約 240 編のみごとな詩編を創造し、従来いわば一般的な世間知の集成であった寓話を個性的な芸術作品とした。以後フランスでは寓話といえばもっぱらラ・フォンテーヌの作品を指すようになり、現在にいたるまで彼の詩句そのままが暗誦されている。ペロー、バンスラード、18 世紀のフロリアンらがラ・フォンテーヌに続いて寓話を試みたが亜流の感をまぬかれない。フランス以外では 18 世紀イタリアのピニョッティ、スペインのイルアルテ、イギリスのゲイ等の寓話があり、なかでもドイツのレッシング、ロシアのクリーロフがよく知られている。

二宮 フサ (c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved.